

# 在日韓国・朝鮮人のシャマニズムとその継承

(これは、1990年に智異山で行われた比較民俗学会で、韓国の民俗学研究者に対して、日本の在日韓国・朝鮮人の信仰の当時の状況を紹介するために行われた報告の要旨です。)

## 1 生駒山をめぐる韓国・朝鮮寺の歴史と現状

### 1-1. 生駒の宗教的伝統と現在

いわゆる「韓国・朝鮮寺」の多く存在する生駒の山は、今日の大阪と奈良の県境、かつての大和と河内の国境にあります。この地は、すでに日本書紀有明天皇元年655年の条の記述にも見られるとおり、古代から山岳宗教の中心の一つでありました。伝説的な修験道の祖、役小角または役行者が、7世紀に初めて修業したのも、生駒と伝えられています。

10世紀初頭の平安時代には、「信貴山縁起」という絵巻物で有名な僧妙蓮によって、信貴山が開かれました。

しかし、生駒の山が今日のように様々な宗教の中心となったのは、16世紀になって大阪が日本の商業の中心地になってからのことです。ことに、徳川時代以降は、多くの町民たちが、物見遊山をかねてこの地を訪れるようになりました。そして明治以降、鉄道が敷かれると、さらに多くの人々が集まるようになったのです。

### 1-2. 山はなぜ宗教の対象となることができるのか？

それにしても、なぜ生駒の山はこのように多くの人々を集める、信仰の対象となりえたのでしょうか。

そこには、まず柳田国男をはじめとする民俗学者の指摘する通り、日本人にとっては山は祖霊の住む神聖な場であるということがあるかもしれません。それに、大和の国の三輪山などに典型的に見られるように、山は神の住む場所でもあります。そこには、大きな岩や本や洞窟があつて、神が宿ったり、降臨したりするのに都合のよいこともあります。また、山は農耕にとって欠くことのできない水をもたらし、川とそれに伴う龍や蛇に対する信仰を育てました。

ことに生駒山のように都市に近い山は、神のすむ他界と人間の住む都市との境界の役割を果たし、格好の修業の場を提供しました。昔から、人々は山中の滝にうたれたり、寺や庵に観もったり、祭祀を行ったりしてきました。

そして、その修業の場としての山



と都市との、もう一つの境界である麓の町や、寺杜にむかう参道には店がならび、楽しい行楽の地ともなったのです。

### 1-3. 韓国・朝鮮寺とはなにか

さて、それでは韓国・朝鮮寺とはなんでしょう。これについては、さきほど紹介した『生駒の神々』のなかに富山大学の飯田剛史先生の精密な記録が紹介されています。飯田先生は、生駒周辺に韓国・朝鮮寺、63寺を確認し、そのうち50寺の調査しておられます。みなさんは、この数を聞いてきっとびっくりされたのではないかと思います。

しかし寺といっても、ここで行われるのは、たいがい巫者（シャマン）が神がかりして神を降ろす賽神（クッ）の儀礼が中心で、韓国系の曹溪宗あるいは日本系の天台・真言の山岳修験系諸派を名のっているもの、宗教法人の形式をとっているものは少ないのです。ほとんどが民家と同じようなたたずまいで、一般の家と区別するのがむずかしいくらいです。

それでも、なかに入ると、①仏をまつる簡単な本堂と、②七星堂や七星神・山神・海神をまつる三神閣と、③賽神場、④行場としての滝、⑤依代としての神竿、⑥地藏堂などがあるのが普通です。

韓国・朝鮮寺での宗教活動は、定期的な年中行事と、不定期の賽神とに分かれます。

年中行事の大きなものは、寺によって異なりますが、一般には4月8日の釈迦



の誕生祝い、7月7日の七星祭り、冬至の三つです。これらの祭引よ、韓国の寺でよく見られるように、多くの信徒が集い、食事をし、踊る、信者たちのコミュニケーションの場です。こうした、祭りの形式は日本の仏教にはあまり見られません。

賽神もまた、韓国式のもので、これについては、飯田先生の説明を直接紹介しましょう。

先生によれば、「賽神は、病気や事業の不振などで悩んでいる信者の依頼に応じて、寺の住職である巫者が、仲間の巫者とグループで行うもので、期間は依頼の内容や依頼者の経済的事情によって、一日ないし数時間のものから一週間以上にもおよぶ大がかりなものまでさまざまである」「賽神の過程は、まず病い災いの原因とみられる祖霊を招き寄せ、歌舞、供物、供銭などでもてなして、これ以上人に災いをかけないように頼み、その願いを聞き入れてもらった上で、再び霊界に送り届けることによって終了する」（『生駒の神々』p. 245）

もちろん、そこには韓国で現在行われている本格的なものとは、かなり違う点もあります。その違いは、まず、巫者のグループ構成に僧侶が入ることです。僧侶は「スンニム（僧任）」と呼ばれ「賽神のなかで、仏に経をあげ、あるいは霊を誦経で供養する役目をもつ」のです。わたしの調査した賽神では、鉦や太鼓（チャング）をたたいて、進行役を努めていました。

次に、女巫が「ポサル（菩薩）」と呼ばれることも違いの一つです。韓国にもポサルの呼

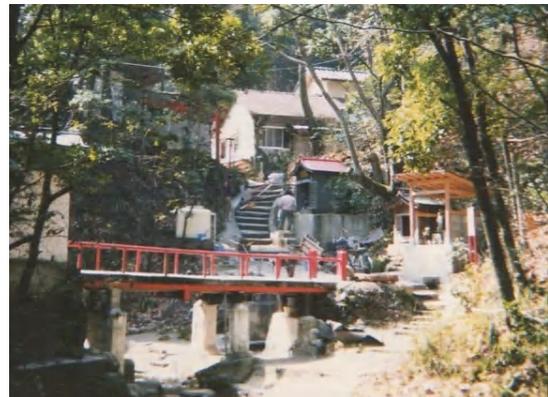
称はありますが、日本の場合、巫女はすべて「ポサルニム」と呼ばれています。再び飯田先生によれば、ポサルとは「要するに、仏教に通じた巫女といえは大過はない」（『生駒の神々』 pp. 247-248）のです。

最後に、祭場がすべて川にそい、修業の場として滝をもつことも、生駒の韓国・朝鮮寺の特色でしょう。韓国の場合も、江陵の端午祭にみられるように、川は巫女たちの祭りの場となりますが、生駒の場合は川と滝が韓国・朝鮮寺のほぼ必須の条件となっているのです。

#### 1-4. なぜ、韓国・朝鮮寺を受け入れることができたか

しかし、それにしても、なぜ生駒の地は、これほど多くの韓国・朝鮮寺を受け入れることができたのでしょうか。それには、いくつかの理由がありますが、まず古代からの伝統があります。

みなさんもよくご存じの通り、古代の日本は朝鮮半島の国々から多くの文化を学びました。仏教もまたその一つで、この地には7世紀後半の白鳳時代に百済王の一族が建立された百済寺をはじめ多くの韓国・朝鮮系の寺があります。



つぎに、山を神聖な場所、神の宿る場所であるとする信仰が、韓国・朝鮮と日本に共通しています。江陵の端午祭では、大関嶺の本を伐って、それを依代として山の神を降ろしますが、これは日本の祭りの原型を示しているといってもよいと思います。

生駒の山やその周辺には、滝や清流のほか大きな本や岩や神水があり、韓国の村や町に現在もみられるタンサン木やソナンダンや薬水のような信仰の基礎がそろうています。また、韓国・朝鮮寺の中核である七星閣に祀られる北斗七星に対する信仰も、星田妙見宮をはじめとする「妙見信仰」として、生駒には古くから見られます。



現在、韓国・朝鮮寺で巫者たちが行っている占いや民間医療も、たとえば石切神社周辺に見られるように、多くの易や占いの店や断食道場で行われてきました。賽神の中心となるシャマンによる託宣も、修業をつんだ山岳仏教の僧によって行われています。なかでも真言宗の観音寺の場合は、住職が女性のシャマンで、多くの信者を集めていますが、その3割は在日韓国・朝鮮入です。また、金峯山修験本宗の不動寺の場合は、信者の実に9割までが在日韓国・朝鮮人の女性です。

しかしこうした伝統に加えて、もっとも重要であると思われるのは、生駒山の立地条件で

す。

みなさんご存じの通り、現在（1990年当時）日本には67万人ほどの韓国・朝鮮人が住んでいます。そのうちの19万人ほどが大阪に在住しており、近隣の兵庫・京都を加えれば、生駒周辺には在日の人たちの4割以上が集中しています。生駒山は、交通の便がよく、大阪の中心部からでも近鉄線を利用すれば30分ほどで着きます。信仰の原型を共有する山が、これほど近くにあれば、在日の人たち、ことに多くの心身の悩みや病を抱えていた女性たちが集まったのは当然のことともいえるでしょう。

韓国・朝鮮寺を開いた人たちの多くは、生駒の滝を中心として修業場を訪れた女性たちでした。彼女たちの回りには、託宣を求めて信者が集まります。山の中であれば、太鼓や鉦をたたいて大きな音をたてて賽神を行っても苦情は出ません。そこが自然と、世俗的利害やしがらみを離れた女たちの憩いの場、レジャーランドになったのだと思います。

## 2 宝塚・宝教寺の場合

### 2-1. 韓国・朝鮮寺の継承

韓国・朝鮮寺のなかには、戦前に創設されたものもごく少数ありますが、ほとんどは1945年以降の、20年から30年の間に建てられたものです。

寺の性格上、創設者の多くが、巫者であり、神がかりして神を降ろし、神と交通する能力をもっています。しかし、その親族や後継者は必ずしも、そうした能力や体験をもちあわせていません。

そのために、寺の継承の問題がたいへんむずかしい。後継者のいない寺は、廃寺になるか、貸し賽神場となるか、新しい性格の違う寺として再生するか、のいずれかの道を選ぶこととなります。

貸し賽神場になった場合は、韓国本土からシャマンが訪れ、賽神を行うことも稀ではありません。また、巫者を助ける僧侶のなかにも、韓国から訪れた曹溪宗などの僧侶がいます。これは、韓国と日本の民俗の交流を考える上でたいへん興味深い問題ですが、いずれにせよ、韓国・朝鮮寺の後継者の問題は深刻です。前述の飯田剛史先生の調査によれば、1985年現在、韓国・朝鮮寺の住職と賽神の関係は次の通りです。

- ①現役で賽神をしている巫者が住職である寺（20）
- ②かつては賽神をしていたけれども、現在は高齢化のために賽神ができなくなった退役巫者が住職の寺。（20）
- ③住職自身は賽神を否定している寺（5）
- ④その他、不明（10）

この中で、「現役で賽神をしている巫者」と言われている人たちの多くは高齢で、1991年の現在では、現役を退いた人がほとんどですから、現状の危うさは御推察の通りです。

こうした中で、韓国・朝鮮寺を日本人の巫者が継承した特殊なケースがありますので、つぎにこれを報告したいと思います。

### 2-2. 宝塚・宝教寺の場合

宝教寺は、大阪から阪急宝塚線で約30分の阪急山本にあります。この寺を私をはじめて

訪れたのは、1990年の3月11日で、曹奎通（チョ・ギュトン）さんに教えていただきました。曹奎通さんは、大阪の在日韓国人の仲間だちと「韓寺を歩く会」をつくって、実に詳しい調査をなさっています。

宝教寺は、生駒とはちょうど反対の六甲山地に連なる谷にあるのですが、この谷の立地は生駒の場合と大変よく似ています。この地は、現在でこそ神戸・大阪のベッド・タウンとして多くの新住民を抱えています。かつて平井村とよばれ、鬼退治と落人伝説の伝承をもつ古い村です。谷の奥には滝があり、滝の裏には千年もまえに尼崎の高僧が、苦心の末に刻んだという不動が祀られています。曹奎通さんの調査によれば、この谷筋には韓国・朝鮮寺が実に7箇所あります。

### 2-3. 李小善さんによる宝教寺の創設

宝教寺を開いたのは、李小善さんという1904年、鎮海の馬山生まれの女性です。李さんが、日本にきたのは、御長男がおなかにいた時といえますから、1925年頃のことでしょう。最初は、御主人と一緒に大阪の三国で洗濯屋さんをしていました。男3人女4人の子宝にめぐまれたのですが、最後の子供が生まれる頃、いわゆる巫病を体験することになります。夜中に突然起きて川に入ろうとしたり、奇行がめだつようになりました。ちょうど戦争の激しくなった1940年代はじめのことです。

それを癒すために、李さんは、毎日電車で山本の不動の滝に通いました。その時、神の声を聞いて人助けをするようになりました。その神の声は、観音の声であったともいいます。

李さんの託宣は、ぴたりと正確に当たり、多くの信者を集めました。大阪では「洗濯ポサル」と呼ばれて、洗濯屋の店に人が集まりすぎて商売ができなくなりました。李さんは、神が降りてからは一切普通の女の仕事を放棄してしまいましたから、御主人や子供たちは、本当に困ったそうです。また、戦争が終わったので御主人の故郷である慶州にもどろうとしましたが、韓国に帰ると「ムーダン」として蔑まれるという李さんの心配をくんで、帰国を断念したといういきさつもあります。

そんなある日、李さんがいつものように滝から帰ってくると、現在の寺のある辺りに牛が寝ていたそうです。李さんはそこに庵を

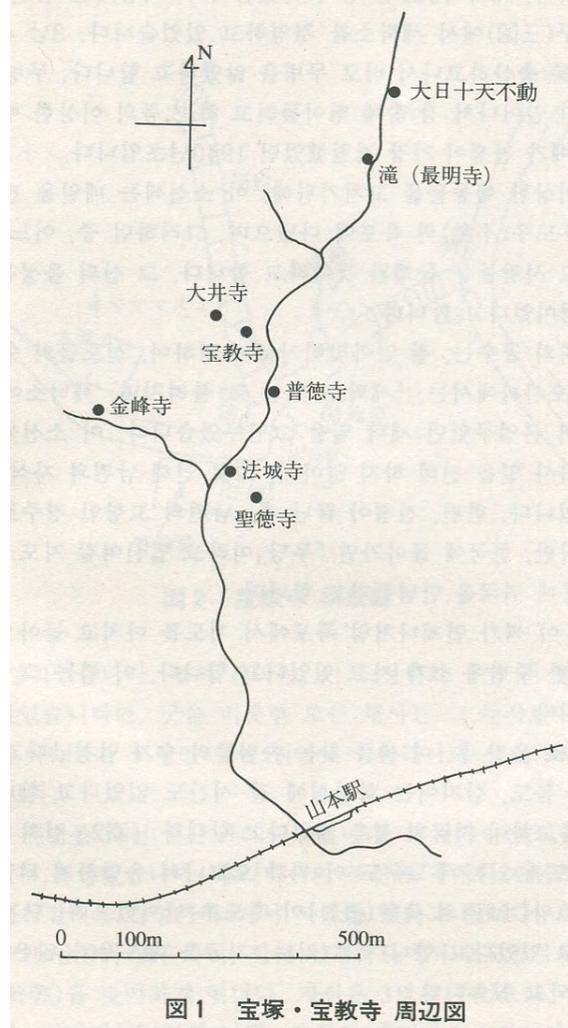


図1 宝塚・宝教寺周辺図

むすびました。

山本に移り住んだ李さんの所には、大勢の信者が押しかけました。李さんは、本当に食事をする間もなく、トイレに立つこともできなかったそうです。そのうちに、建物も手ぜまになり、現在のような寺ができました。

滝の不動も李小善さんが来てから、有名になったということです。それ以前は、8月の土用の丑の日が不動さまの縁日で、平井村が管理していたそうですが、現在では多くの人の信仰を集めています。

#### 2-4. 藤田智恵子さんとの出会い

1984年に李小善さんがなくなると、後を継いだのは藤田さんと関川さんという二人の日本人女性でした。お寺の管理は、李小善さんの長男の崔聖姐さんと奥さんの二人がしていますが、賽神などの神祭りは、当初この二人が担当しました。現在では、藤田さんは高齢のために引退され、もっぱら関川さんが賽神をしています。

この二人の日本人女性のうち、私が詳しくお話をうかがったのは、藤田智恵子さんです。藤田さんは、1908年に平井村の旧家に生まれました。お父さんは、大変な資産家でしたが、藤田さんが女学生の頃、平壤に行き事業をおこしました。藤田さんも結婚して、軍人であった御主人と一緒に咸鏡北道で鉄道の仕事をして、終戦をむかえます。3人の子供のうち、2人は日本に帰してありましたので、小さな末の息子との苦難の末、帰国して平井村にもどります。

藤田さんは、信仰があつく、経済的にも恵まれていましたが、若い頃から戦争・引き上げなどの大きな苦難を体験し、夫を失うなど家庭内の苦しみや、眼病などの病にみまわれてきました。そしてその苦難を、そのつど、さまざまの神秘体験を通して克服してきたのです。現在の藤田さんは、少し足が不自由ですが、それは54才の時、能勢の妙見山を訪れて、雪の上ですべて痛めたものです。

藤田さんが、李小善さんと出会ったのは、60才の時ですから、1968年頃のことです。毎日、滝に通う藤田さんに、李さんが声をかけたそうです。李さんの言葉は、おそろしいほど藤田さんの苦しみを言い当て、その時から藤田さんは李さんと居をともにすることになりました。李さんの命ずる修業は、きわめて厳しいものでした。朝は5時に起きて、夜は12時に寝る。そんな生活が続いたそうです。

藤田さんによれば、李小善さんは、読み書きができないし、仏教に関する知識もありませんでした。けれども、東西南北の山の神、海の神、広場の神、広道、細道、辻の神、地下の水の神を拝み、たいへん純粋な信仰心をもっていました。むしろ、文字を知らず、仏教に対する知識を欠いていたからこそ、深い洞察力をもつことができたのだということです。至言であると思います。

#### 2-5. 宝教寺の構成と祭り

現在の宝教寺は、本堂、賽神堂を中心に構成されています。真言宗ですが、宗教法人ではありません。本尊には、釈迦・不動・弘法大師がまつられています。七星堂があり、ほかに山神を祀っていますが、山神には特別な祭りはありません。水の神は、滝です。

宝教寺で行われる祭祀は二つに分かれます。一つは年中行事で、ほぼ毎月ありますが、大きなものは3月の節句、4月の釈迦生誕日、5月の端午、7月7日の星祭り、8月のお盆（秋夕）。

9月9日は「クウォル・クウィル」の無縁仏をとむらいます。12月22日は冬至の祭りで小豆粥をたきます。法要のある日には信者が泊まって、チャングをたたいて踊って、楽しめます。これは女が中心で、韓国の寺参りと大変よく似ています。

宝教寺で行うもう一つの祭祀は、いうまでもなく賽神です。これは、まず本堂で、相談をうけ、因縁の深いものには特別な祭りを行います。

李小善さんの行った宝教寺の賽神を、藤田さんの話によって再現してみましょう。

当時、賽神は李小善さん、藤田さん、関川さん、それに坊さんの3、4人で行うのが普通でした。（坊さんは、何度か変わり、現在の方は韓国の曹溪宗の方です。）もちろん賽神の基本は韓国式で、まず最初に釈迦に礼をして、次に不動と星神に「今日、この人のために賽神をおこないます」と挨拶をします。

賽神のやり方は、お坊さんによって多少ちがいますが、だいたいいつも同じでした。先祖の霊を降ろすには、韓国人の巫者は韓国語で、日本人の巫者は日本語で神降ろしをします。霊が降りると、霊はさまさまのことを要求します。そこで、この望みを果たしてあげることが大切です。おなかのへった霊には食事、水の飲みたい霊には水、煙草の場合は煙草を供えるのです。

祭祀のときに使う布ひもは三色。水色は氏神、黄色は先祖、赤は不動をあらわすといえます。

このひもを結び、その結び目が解ければ、因縁も解けるのです。結び目は、とてもゆるく、すぐに解けるように結んであるのですが、因縁が深いとなかなか解けません。そんな時には、お金をそえてあげます。すると、さっと結び目がほどけます。

賽神の時には、巫者はごく自然にトランスの状態に入り、自然に霊の声がでるそうです。しかし、自分を「空」にしないとこの仕事はできません。神降ろしは、こちらが見ていても、たいへん激しい行為ですが、トランスしている巫者は不思議と疲れなそうです。もちろん、霊がうまく降りない場合には、とても疲れます。戦後は、広島からよく賽神を依頼する人が来たといえます。

祭祀の性格によっては、宝教寺で賽神をすることのできないこともあります。たとえば、依頼主の家に障りのある場合です。そんな時は、家に出張して賽神を行います。

その場合は、まず炊事場の荒神さまを拝みます。藤田さんの祈祷は日本式、李小善さん

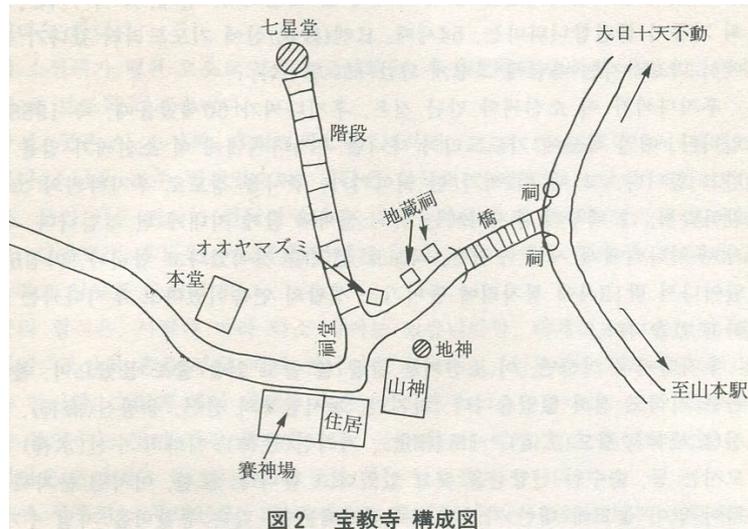


図2 宝教寺 構成図

は韓国語です。塩を三箇所、水を三箇所供え、酒を供えます。海山の神に、大根、にんじん、ごぼう、しいだけ、高野豆腐、スルメ、昆布の七色の供え物。次は、米をいっぱい盆にのせ、卵を三つ供えます。紙銭も用意します。

炊事場の次は、入口です。やはり米をいっぱい盆にのせ、卵を七つ供えます。やはり海山の神に大根、にんじん、ごぼう、しいだけ、高野豆腐、スルメ、昆布の七色。入口では、高天原の神と不動に祈ります。般若信経、観音経なども唱えます。面白いのは、煮しめで日本の家の場合には日本式ですが、韓国の家では、ワラビ、モヤシをいれて韓国式にします。

入口の次には、先祖を拝みます。日本の場合は仏壇、韓国の場合もあれば仏壇。仏壇のない場合は、祭壇をつくります。日本の場合は、先祖の霊を戒名で呼び出し、阿弥陀経を読みますが、この時、霊を連れてきてくれるサゼ（差使＝チャサ）という使い神をしっかり拝まなければなりません。藤田さんは、このサゼを日本の閻魔と同じものと理解しているようです。先祖を迎えるときには、着物をたくさん用意して、名前を書いておくそうです。先祖の霊には、またぬるい湯を沸かして、まず風呂にはいってもらおう。その時、紙を切って人形を用意しておくといいますが、この儀礼は、僧がおこないます。この風呂にかぎらず賽神の大体のことは僧が行い、「ポサルは、さばくだけ」であるとも言いました。「さばく」というのは、おそらく「霊を迎え、霊の願いを聞き、踊りによって慰め、満足して帰ってもらう」という、一連の過程を言うのでしょうか。入口などの清めも、僧が行うことがおおかつたといえます。僧がしない場合は、藤田さんが拝んだのだそうです。

このように、先祖を迎えるだけでなく、ほかにも風呂や便所も拝みます。とくに便所には酒と赤飯を供えますが、便所の神はきれいずきで、便所を掃除するときれいな子が生まれるといわれます。

祭祀が終わったら、サゼをよく拝み、さらに山、岩、海の神を拝むみ、三つ供え物を行います。このあと、着物を焼いてゆっくり拝みます。宝教寺で賽神をする時は、入口の川の所で焼いたそうです。先祖を大切に逆らないと、仏が残るといいます。

李小善さんは、このほかに店の開店や、家の新築祝い、地鎮祭なども行いました。また、時には事故の現場にいて、不幸な魂を鎮めることもしたといえます。

### 3 まとめ

今回、私が報告したような賽神は、伝統的に韓国で行われてきた祭祀の様式からは、大きく逸脱したものであり、不完全きわまりないものであるかもしれません。実際、現在の生駒山などの賽神を調査してみれば、もっと完全な祭祀が報告できるに違いありません。また、そのような大がかりな祭引については、すでに飯田剛史氏が精緻な調査報告を公表されています。私は、もちろん、こうした正統的な祭祀が継承されることを望んでいます。しかし、その一方で、在日韓国・朝鮮人の一世たちがもたらした素朴なシャマニズムが、日本に根づき、古くからあった日本の宗教的伝統と共鳴したことは、両国の常民の文化を考える上でたいへん意味深いことのように思えるのです。

まったく偶然のこととはいいいながら、ほぼ同年齢の二人の婦人が、一方は韓国から日本に渡り、片方は日本から韓国・朝鮮に渡り、苦難のすえに出会い、師弟となってシャマニズムを継承したことは、象徴的な出来事であるような気がします。

藤田さんの話を聞くと、祭祀には日本の仏教や民間信仰の要素がずいぶん取り入れられているのが分かります。訪れた霊を慰めるために、日本人のためには日本式で賽神をしています。

しかし、その中核となるポサルの「さばき」は、やはり、韓国・朝鮮式なのです。今日、宝教寺を訪れて関川さんの行う賽神に同席させていただくと、本当に不思議な気がします。

在日の二世はともかく、三世、四世となると、賽神でせつかく先祖の霊が降りてきても言葉がわからず、通訳が必要というのが現状です。こうしたなかで、生駒や宝塚の韓国・朝鮮寺がどうなっていくのか。また、賽神にかぎらず、在日の韓国・朝鮮人の祖先祭祀がどうなっていくのか、いましばらく調査を続けてみたいと考えています。

**参考文献：『生駒の神々』（宗教社会学の会編・1985年・創元社）**